The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サルトルにおける愛の概念について ： 『存在と無』における現象学的他者論を中心に
Author(s)	赤木, 優希
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 3-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102517
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サルトルにおける愛の概念について
『存在と無』における現象学的他者論を中心に

赤木 優希

要旨

本稿の主題は、恋愛における他者との共生がどのように可能であるかを、現代フランスの哲学者であるジャン＝ポール・サルトルの思想に基づいて検討することである。現代社会において、結婚を媒介として恋愛と性と生殖を一体のものとして捉えるロマンティック・ラブ・イデオロギーが恋愛をめぐる支配的な言説となっている。これに対して、『存在と無』においてサルトルは、必然的に挫折へと至る恋愛のあり方を、その現象学的他者論の一つとして分析した。先行研究において、彼の恋愛論は愛を過剰に消極的に捉えるものとして批判されてきた一方、あくまでも他者の自由を尊重する彼の分析は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを相対化させる恋愛観として再評価されてもいる。しかし、そのように挫折へ至る愛が、どのようにして恋愛の持続可能性と両立するのかは、定かではない。本研究は、このような観点から『存在と無』における現象学的他者論を再検討し、特に性的欲望に関する議論を参照しながら、そこにおいて愛の持続可能性がどのように捉えられうるのかを考察する。それによって、サルトルの恋愛論の今日的な意義を明らかにすることが、本稿の目的である。

目次

1. はじめに
2. 『存在と無』における恋愛論の背景
3. 愛の理想
4. 愛の自壊性
5. 先行研究におけるサルトルの恋愛論への批判的検討
6. 再開される愛
7. おわりに

キーワード

サルトル
愛
まなざし
他者
現象学

大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻基礎人間科学講座哲学と質的研究：akagi.j.7194@icloud.com

1.　はじめに

恋愛は、日常生活における他者との共生が先鋭的に主題化される関係性である。千田によれば、現代社会における恋愛を支配する言説は、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」と呼ばれる。それは、結婚と生殖を恋愛の完成形態として捉える発想であり、「愛と性と生殖とが結婚を媒介することによって一体化されたもの」（千田 2011: 16）として理解される。吉澤が指摘するように、このような言説が支配的になることで、「男性と女性は、ある日運命的に出会って恋に落ち、一生の伴侶として愛しあい子どもをもうけ家族を成す、それが『普通』であるという考え方が、広く社会に浸透した」（吉澤 2014: 112）。ここには、「一生の伴侶」という安定的で永続的な関係こそが、恋愛の本来的な形態であるとする、一つの社会規範が示されている。そしてそれは、結婚と生殖によって、そうした安定的な永続性を獲得しえない恋愛、つまり不安定な恋愛は、非本来的で望ましくない恋愛である、という見方を正当化するものである。

しかし、このような見方は恋愛の可能性を制約するものであり、他者との共生を貧しいものにしてしまう可能性がある。また、こうした恋愛観は決して唯一のものではなく、それとは別の仕方で恋愛を捉えることも可能である。このような観点から、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを相対化するために、フランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre 1905 - 1980）の恋愛論は、有益な手がかりを与えるものとして、注目に値する。

『存在と無』において独自の現象学的存在論を構想したサルトルは、他者論の一環として愛の概念を論じている。彼が主題化するのは、神への愛や家族への愛ではなく、あくまでも他者との恋愛である。その特徴は、恋愛の肯定的な価値を賛美するのではなく、むしろその負の側面を強調する、という点にある。とりわけ際立って独創的なのは、彼が愛の理想を必ず挫折するものとして捉えていたことだ。こうしたサルトルの恋愛論の全体像を明らかにし、その理論的な構造や、今日的な意義と制約を考察することが、本稿の主題である。

以下では次のように議論を進める。まず、サルトルの恋愛論の背景として、

『存在と無』の基本的な概念系を整理する(2)。次いで、同書における愛の概念の特徴と(3)、その理想が必然的に挫折に至る理由を明らかにする(4)。その上で、先行研究におけるサルトルの恋愛論への批判を概観しつつ(5)、そこに残された課題について『存在と無』を改めて検討し、特に性的欲望に関する議論に注目しながら、考察する(6)。以上を踏まえた上で、サルトルの愛の概念が持つ今日的な意義と制約を明らかにして、本論を終える(7)。

2.　『存在と無』における恋愛論の背景

サルトルは『存在と無』において二つの対立する概念を軸にしながら議論を展開する。すなわち、第一に「対自存在(être-pour-soi)」であり、第二に「即自存在(être-en-soi)」である。

「対自存在」とは、「それがそれであらぬところのものであり、それであるところのものであらぬ」(Sartre 1943: 110)ものとして説明される、人間の存在のあり方である。サルトルによれば、それがあるところのものとは本質に他ならない。しかし人間はいかなる本質によっても規定されず、「投企」によって自己を創出する存在である。これに対して「即自存在」は、「それがあるところのもの」(ibid., 32)として説明される、本質によって規定された存在のあり方である。その典型例として挙げられるのが、道具だ。たとえばコップや椅子は、その用途がすでに規定されている存在者であり、その意味において即自存在である。このとき対自存在と即自存在は、事物を認識する主体(対自存在)と、その主体に事物として認識される対象(即自存在)という関係にある。

対自存在として存在する人間は、いかなる本質にも規定されないという意味で、自由である。対自存在の自由は、即自存在であるところの事物を対象化し、超越する。しかしその自由は、自分がそれ自体としては何者でもない、自分が存在することにはいかなる理由もない、という不安を喚起させもする。サルトルは次のように述べる。

> 人間は自己の本質についての判断以前的な了解をつねにたずさえているが、まさにこの事実によって、人間は一つの無によって自己の本質から

引き離されている。本質とは、人間存在が自己自身について、あったものとしてとらえるすべてである。ここにおいて、不安は、あるところのものからの不断の離脱という仕方で自己が存在する限りで、あるいはむしろ、かかるものとして自己が自己を存在せしめる限りで、自己の把握としてあらわれる。(ibid., 70)

サルトルによれば、人間は常に自らの本質に関する「判断以前的な了解」を有している。それは、言い換えるなら、主題的に意識することなく、自分がどのような存在であるかを了解している、ということだ。しかし、人間は対自存在である以上、そうした本質によっては規定されていない。したがって人間はそうした了解から「離脱」し続ける。そうした仕方で自己を把握させる気分こそが、不安に他ならない。

ただし、このように対自存在であるところの人間が、その自由を失うという事態が起こりえる。それが、自分以外の対自存在、すなわち他者に遭遇したときである。

「私」が他者を他者として了解できるのはどのようなときだろうか。それは、他者が「私」と同じように対自存在であることを、「私」が了解できるときである。そのときその他者もまた、「私」と同じように、即自存在を超越する自由を有している——すなわち即自存在を対象として認識することができる。サルトルによれば、そうした他者の自由を「私」が経験するのは、「私」が他者の認識の対象とされるとき、つまり他者が「私」に「まなざし(regard)」を向けるときである。そのとき「私」は、その他者によって対象化され、即自存在になる。すなわち対自存在であったはずの「私」は、即自存在へと変容してしまうのだ。

サルトルは、そうした「まなざし」の経験を、次のような例によって説明している。「私」が、誰もいない廊下に一人でおり、ある部屋の鍵穴を覗いている。すると誰もいなかったはずの廊下に人が現れ、鍵穴を覗く「私」をまなざすのである。「私」は、他者が「私」を見たとおりに「私」が存在していることを自認し、羞恥する。他者からのまなざしによって、「私」は「真に、扉のところで盗み聞きをしつつあるもの」(ibid., 299)でしかなくなる。「私」は、一人でいるときには対自存在であり、様々な可能性に開かれた自由な存在だった。しかし、

他者の「まなざし」を向けられた瞬間に、そうした可能性は閉ざされ、「扉のところで盗み聞きをしつつあるもの」以外の何者でもなくなってしまう。それによって、対自存在だった「私」は即自存在へと変容する。そのとき「私」は、自らの自由が崩壊することを感じるのである。

このように、他者によって「私」が即自存在へと変容する出来事を、サルトルは「疎外（aliénation）」（ibid., 324）と呼ぶ。他者に疎外されるとき、「私」は羞恥を経験する。この羞恥が意味する事態を、サルトルは次のように分析している。

> 純粋な羞恥は、これこれの非難されるべき対象であるという感情ではなくて、むしろ、一般に、一つの対象であるという感情であり、私が対象にとってそれであるところのこの存在、下落した、依存的な、凝固したこの存在の内に、私の姿を認めるときの感情である。羞恥は、根源的な失墜（chute originelle）の感情である。しかもそれは、私がこれこれのあやまちをおかしたであろうという事実から由来するのではなく、ただ単に、私が世界のなかに、もろもろの事実のただなかに、≪落ちた≫という事実、そして私があるところのものであるためには、私が他者の仲介を必要とするという事実から、由来するのである。（ibid., 328）

サルトルによれば、羞恥とは、対自存在として即自存在からなる事物を超越していたはずの自己が、他者にとっての「一つの対象」へと凝固されるときの、「根源的な失墜の感情」である。ここで注意するべきことは、「失墜」が、即自存在へと変容したことだけではなく、それによって自己が様々な事物のなかの「一つ」になったということ、そしてその帰結として、自己の絶対性が失われたことに由来する、ということだ。「まなざし」の脅威は、それが「私」の自由を失わせるということだけにあるのではなく、それによって自己が、「もろもろの事実のただなか」にある、様々な事物の一つへと相対化されてしまう、という点にも存するのである。

3. 愛の理想

以上のように、他者の「まなざし」は「私」から自由を奪い、その価値を失墜させる。「私」はそうした脅威に対して抵抗を試みる。サルトルはそうした抵抗のうちに、「私」の他者に対する「最も原初的な諸関係」(ibid., 401)を洞察し、その態度を二つに区分する。第一に、他者の自由を自分のものにしようとする態度であり、第二に、他者の自由を否定しようとする態度である。両者の違いは次の点にある。すなわち、第二の態度があくまでも「私」の自由を回復し、他者から自由を喪失させることを目指すのに対して、第一の態度は、他者が自由であること自体は否定しない、ということだ。サルトルによれば、それは、「他者から自由というその性格を除き去ることなしに、この自由を取り戻し、この自由を奪い取ろうと試みること」(ibid., 403)である。

サルトルはこの試みの一つの典型的な事例を、愛のうちに洞察する。ただし彼が注目するのは、「私」が他者を能動的に愛することではなく、他者から受動的に愛されることである。なぜなら、他者は「私」に対して「まなざし」を向ける存在であり、その限りにおいて他者こそが自由で能動的な存在であるからだ。ただし、愛されるということは、単なる「まなざし」による疎外、つまり商品化され、消費されることとは異なる現象を引き起こす。[1]

サルトルによれば、愛されようとすることは、「相手にとって≪世界のすべて≫であることを欲する」ことであり、「世界の側に身を置く。彼は、世界を総括するものであり、世界を象徴するものである」ことを欲することである(ibid., 408)。愛されようとすることが目指すのは、「私」が目の前にいなくても、相手の世界が「私」によって意味づけられ、相手の経験する個々の現象がすべて「私」へと帰趨していく、ということだ。相手がこの世界の何を経験していようと、そこに「私」を感じるとき、「私」はその相手から愛されている、ということを実感できる。

「私」は、たしかに相手にとっての対象ではあるが、もはや相手の生きる世界に存在する様々な事物のなかに相対化されてはいない。むしろ「私」は、そうした事物の了解可能性の条件に位置するのであり、だからこそ相手の世界のなかで絶対的な地位を占めるのだ。前節で確認した通り、「私」が「まなざし」

によって脅かされるのは、それが「私」を、他者の世界にある様々な事物へと相対化することで、「私」が失墜を被るからである。それに対して、他者に愛されるとき、「私」は他者に対象化されながらも、そうした失墜を免れることができる。サルトルは次のようにも説明する。

> もし、他人が私を愛するならば、私は、超出されえないものとなる。いいかえれば、私は、絶対的な目的であるはずである。その意味で、私は道具性を免れている。世界のただなかにおける私の存在は、まさに、私の「対私的-超越」の厳密な相関者となる。というのも、私の独立性は、絶対的に保護されうるからである。他人が私をそれであらせるはずの対象は、一つの「超越-対象」であり、一つの絶対的な帰趨中心であって、そのまわりに、世界のすべての道具-事物が単なる手段として配置される。それと同時に、〔他人の〕自由の絶対的な限界として、すなわちすべての価値の絶対的な源泉の絶対的な限界として、私は、起こりうるべきあらゆる価値下落から保護されている。(ibid., 409)

サルトルは、このように愛されることによって疎外による価値下落を乗り越えようとする試みを、「我有化（appropriation）」と呼ぶ。ただし、疎外が他者による「私」の自由の否定であるのに対して、我有化は決して他者の自由の否定ではない。むしろ、前述の通り、愛されるということは他者の自由なしには成立しえない。「相手の全面的な服従は、恋する人の愛を殺すことになる」(ibid., 407)。我有化は、あくまでも「自由としてのかぎりにおける他人の自由を奪い取ろうとする」(ibid., 407)試みなのである。

ただしサルトルは、愛がもたらす対自の変容として、失墜への抵抗とは別の側面を指摘してもいる。それが、愛されることによる、不安の克服である。

> 愛される以前には、われわれは、われわれの存在という、理由づけられずまた理由づけられることもありえないこの結節によって、不安であったのにひきかえて、つまり、われわれはわれわれを≪余計なもの≫と感じていたのにひきかえて、いまでは、われわれは、われわれのこの存在が、

そのすみずみまでも、〔他者の〕一つの絶対的な自由によって取り戻され、欲求されているのを感じる。(ibid., 411)

前述の通り、対自存在は「それがそれであるところのものではなく、それであらぬところのものである」ような存在であり、根本的に自由でありながら、だからこそ同時に不安である。それに対して愛されることは、「私」の自由を否定することによって不安をも解消する。他者から絶対的な存在として「欲求」されることで、「私」は「理由づけられずまた理由づけられることもありえない」自己に対して、自らが存在するべき理由を見いだすことができる。そのようにして不安は乗り越えられるのである。

そうであるとすると、愛がもたらす積極的な価値には、少なくとも二つの側面がある。第一に、疎外による失墜への抵抗であり、第二に、対自存在の不安の克服である。両者は同時に起こるが、解決が図られる問題は異なる。前者はあくまでも他者の「まなざし」によって喚起される問題であり、後者は「私」自身が抱える問題である。

4. 愛の自壊性

以上のような仕方で、サルトルは他者に対する原初的な関係として、愛の理想を分析する。ただし、そうした理想は実現されうるものとして描かれるわけではない。むしろサルトルは、愛の理想はその内的な構造に基づいて、自ら挫折へと至る契機を抱え込んでいる、と指摘する。

第一に、サルトルによれば、愛は必然的に「欺瞞」(ibid., 417) へと陥る。前述の通り、愛するということは、愛されたいと願うことである。「私」はさしあたり相手から愛されることを願う。しかし、愛することが愛されたいと願うことである、という等式に従うなら、相手が「私」を愛するということは、相手が「私」から愛されたいと願うことを意味するはずである。このとき「私」は、相手から愛されることを願っていたはずなのに、「私」が相手を愛することを問われることになる。ところが、「私」が相手を愛するということは――話が振り出しに戻り――「私」が相手から愛されたいと願うことである。この

ようにして、愛は「無限指向」(ibid., 417) に陥る。愛が成立するのは、愛し合う二人が、「他方から愛してもらいたいと思っているにもかかわらず、『愛するとは愛されたいと思うことである』ということに気づかないし、したがってまた、『一方から愛してもらいたいと思うことによって、こちらが欲しているのは、実は、他方がこちらから愛してもらいたいと思うようになることである』ということに気がつかない」(ibid., 415) ときだけである。

この欺瞞が致命的なのは、相手が自由であり、「私」がその「まなざし」によって対象化されているという、愛の基本的な条件を覆すからである。「私」が相手から愛されたいと願うことが、「私」自身が相手を愛することへと反転するなら、「私」は相手を愛するか否かを選択する自由な存在になる（その自由は、結局のところ、再び相手から愛されたいと願うことへと反転していくのであるが)。そのとき「私が人から愛されれば愛されるほど、私は私の存在を失い、私は私自身の責任に、私自身の存在可能に、引き渡される」(ibid., 417)。それは、「私」が相手から愛されることで享受していた存在理由を失い、再び不安に陥ることを意味するのである。

第二に、愛は常に不安定である。なぜなら、相手が自由であるということは、相手が変わらずに「私」を愛し続ける保証はない、ということを意味するからだ。サルトルによれば、「他人の目覚めは常に可能である」(ibid., 417) のであって、「他人は、いついかなる瞬間にも、私を対象として出頭させることができる」(ibid., 417)。相手は、「私」を相手の世界の絶対的な存在に留めることを止め、世界の中に存在する様々な事物と並列する存在へと相対化し、それによって「私」の価値を再び失墜させるかも知れない。しかし、その可能性に常に開かれているからこそ、相手は自由だとも言えるのである。[2]

こうした自壊性によって、愛は必然的に挫折に至る。このことが意味しているのは、その理想を目指して実践されるとき、愛が挫折しないことはありえない、ということだ。サルトルの恋愛論に従うなら、もしも他者への愛がその理想を達成しているかのように見えるなら、それは常に何らかの自己欺瞞を伴ったものである、ということになる。同時に、このことは見方を変えれば、たとえ愛が挫折に終わるのだとしても、それはその愛が非本来的であった、ということを意味するわけではない。人間が他者を本来的に愛するから

こそ、その愛は挫折に至ると考えられるからである。

5. 先行研究におけるサルトルの恋愛論への批判的検討

戸谷が指摘する通り、愛をあくまでも挫折に至らざるをえないものとして捉えている点に、西洋の哲学史におけるサルトルの恋愛論の独自性がある。先行研究において、そうした特徴が消極的に評価されることも少なくない。(戸谷 2024: 159)

リラールは、「サルトルが、人間の空虚感に終止符を打つことになる愛、常に拡散し、常に自己と一致できないでいるわれわれの存在の統合をもくろむだろう愛を夢見ていたことは疑いえない」(リラール 1972: 101) と指摘しつつ、そうであるにもかかわらず、「愛の投企は実現不可能」(ibid., 101) とする点で、彼を批判する。また吉永は、サルトルの愛をめぐる議論が「真正の他者に至ることの不可能性を宣言」するものであるという「致命的な欠点」を抱えている、と指摘する(吉永 2004: 13)。熊野は、愛の理想が矛盾しているがゆえに、愛は「必然的に挫折する」のであり、「愛は不可能である」と述べる(熊野 2022: 148)。さらにワイアットとリーは、『存在と無』のうちに見いだされる愛の問題を解決不可能なものと見なし、サルトルの別の著作に違った回答を見出そうとする (Wyatt 2006; Rae 2012)。このように、先行研究において多数派を占めているのは、サルトルが愛をあくまでも実現不可能なものと見なしていたことを強調し、そしてそれを乗り越えられるべき問題として捉えるものである。

これに対してスティーブンスは、こうしたサルトルの恋愛論を再評価しうる解釈を提示しようとする。たしかに愛は必然的に挫折へと至るが、しかしそれを「価値ある努力」として理解することは可能である。彼は次のように述べる。

> 恋人を主体として認識し尊重すること、そして (おそらく暗黙のうちに) 恋人の客体としての側面を利用しないことに同意することが、おそらく私たちが愛に望むことのできる最大限のことなのだろう。これは愛の理

想のもろもろの目的からはかけ離れたものだろう。しかし私たちは、自己と他者の一体化が無益な企図であることを受け入れ、他者から具体的なアイデンティティを欲望することから離れ、そして愛によって得られる喜びを――その理想が矛盾したものであったとしても――ただ「それだけのために」追求することができる。〔……〕このようなより小さな（smaller）愛の概念は、私たちの思考に留まる理想との不利な比較にさらされるかも知れない。しかし、私見では、それは愛の持続的な企図を形成するように思える。サルトルの思想に、それを原理的に否定するものは見当たらない。（Stevens 2008: 6）

ここでスティーブンスは、愛の理想が実現不可能であることと、愛の企図が持続可能であることを、区別している。たしかに、愛の理想を実現することはできない。しかしそれは、実現不可能なものとしての理想を、実現不可能であると認めたうえで、愛を企図すること自体が不可能であることを意味しない。なぜなら私たちは、愛の理想が矛盾を抱えていることを自覚したからといって、愛の企図をやめるとは限らないからだ。したがって、その理想の実現不可能性を自覚しながら、他者を主体として尊重することで、愛に持続可能性を与えることができる。スティーブンスは、そうした愛のあり方を、「より小さな愛の概念」と呼ぶ。

サルトルの恋愛論を肯定的に評価しうる視点を提示している点で、スティーブンスの研究には注目すべき独自性がある。ただしそこには依然として不十分な点も残る。それは、「小さな愛」がなぜ「持続可能な企図」として理解されるのかが、首尾一貫して説明されていない、ということだ。確かに、愛を「小さな」ものとして捉えることによって、言い換えるなら、自己と他者の一体化を諦めることによって、そうでなければ簡単に生じるであろう関係性の破綻を免れることはできるかも知れない。しかしそれは、サルトルが分析した、愛の自壊性そのものを解消するには至らないだろう。「小さな愛」もまた、構造的に自壊性を有しているに違いない。そうであったとしても、それが「持続可能な企図」であると考えるためには、愛の持続可能性をその自壊性と両立可能なものとして説明できなければならない。しかし、スティーブンスはそう

した首尾一貫した説明を与えてはいないのである。

6. 再開される愛

以下において、『存在と無』へと改めて立ち返ることによって、スティーブンスの研究の不足を補う解釈を提示してみたい。

前述の通り、サルトルは愛をその自壊性によって必然的に挫折するものとして説明した。ただし、愛の挫折は他者との関係性の終焉を意味するわけではない。むしろそれは新たな別の関係性へと移行していくのである。彼はその新たな関係性を「性的欲望」に駆られたものとして説明する。性的欲望とは、「他人の自由な主観性を奪い取ろうとする私の根原的な試み」(Sartre 1943: 422)に他ならない。

性的欲望もまた、他者の「まなざし」に対する「私」の根源的な態度である。愛において、「私」は自らに「まなざし」を向ける他者のすべてになることで、「私」が経験する疎外を緩和しようとするが、それは挫折に終わる。その挫折を経験した「私」は、今度はそのように「私」を疎外する他者の主観性を、自分の力で打ち消すことによって、他者からの疎外状態を解消しようとするのだ。

サルトルによれば、こうした他者の主観性の支配は、他者の身体を性的快楽によって肉体へと置き換えることによって遂行される（ibid., 430）。彼は身体と肉体を厳密に区別する。身体とは、人間がこの世界において主体として存在する様式である。たとえば身体としての手は、人間にとって自らの意のままになる器官であり、人間はその手を支配し、自らの自由な企図を達成するために使用する。それに対して、肉体はこの世界において単なる客体として存在する様式である。肉体として理解された手とは、単なる物体として、細胞の凝集として構成されたものとしての手である。たとえば神経の麻痺によってもはや自由に動かすことができなくなった手は、もはや自らの意のままになるものではなく、まるで自分に付け加えられた余計な物体のように感じられるだろう。

性行為は、他者に快楽を感じさせることで、身体を肉体に変える試みである。快楽を分かち合うことによって、反応的な態度を取らされているとき、人間

は自分の身体を意のままに制御することができなくなってしまうからだ。サルトルはそうした事態を「受肉」(ibid., 429) と呼ぶ。受肉を達成することで、「私」は他者の主観性を自らの力で打ち消そうとする。ただし、そのとき、性行為は他者だけではなく、「私」の身体もまた肉体に変える。快楽は分かち合われるものであり、そうであるからこそ、性行為は他者の身体を肉体に変える力を持つ。性的欲望は、そのようにして意識を失うような快楽を共有することで、他者を主体の地位から引きずり下ろし、「まなざし」の脅威を無効化するのだ。

ところが、こうした性的欲望もやはり必然的に挫折する。なぜなら、意識を失うほど快楽を共有しようとする「私」は、逆説的に、そうした快楽を作り出そうとする先鋭的な意識を抱くからである。こうして性的欲望は「快楽についての一つの反省的意識」(ibid., 437)を引き起こす。しかしそれは、「私」自身が受肉することに失敗することを意味する。そして、性行為が「私」と他者との相互の受肉によって成り立つ以上、「私」が受肉に失敗すれば、他者を受肉させることもできない。サルトルによれば「いまや私が、他人の身体をとらえ、これを引き寄せ、これをつかまえ、これを齧ろうとこころみる、というただそれだけでの事実からして、私の身体は、肉体であることをやめる」のであり、「それと同時に、他人も、受肉であることをやめる」(ibid., 438)のである。

こうして、愛の挫折によって喚起された性的欲望も、同じように挫折する。ではその挫折の後には何が起きるのか。興味深いことに、サルトルによれば、性的欲望の挫折は再び愛を呼び起こすのである。「愛はそれ自身の内に自己の挫折を見いだす。性的欲望は、愛の死から出現するが、やがてみずから崩れ去って、ふたたび愛に場所を譲る」(ibid., 448)。すなわち、愛の挫折は性的欲望を生みだし、性的欲望の挫折は再び愛を生みだすのだ。サルトルはそこに強い必然性を洞察している。彼は次のように述べる。

> 「対象-他人」に対するすべての行為は、それ自身の内に、一つの「主観-他人」への隠された暗黙の指示を含んでおり、この指示は、「対象-他人」に対する行為の死である。「対象-他人」に対する行為の死のうえに、「主観-他人」を奪い取ることをめざす一つの新たな態度が生じるが、今度は、

この新たな態度が、自己の不安定性を顕示し、みずから崩れ去って、ふたたび逆の行為に場所を譲る。かくして、われわれは、際限もなく、「対象-他人」から「主観-他人」へ、また逆に「主観-他人」から「対象-他人」へ、指し向けられる。この運行は決してやむことがない。他者に対するわれわれの関係を構成しているのは、突然の方向転換をともなうこの運行である。(ibid., 448)

「対象-他人」とは、言い換えるなら、他者を客体として捉えようとする試み、すなわち性的欲望である。しかしそれは「主観-他人」へと向かう可能性、主体としての他者と関わろうとする可能性を持つ。それは、サルトルの恋愛論に従うなら、愛に他ならない。性的欲望の成就に失敗した人間は、再び、その相手から愛されたいと願う。もちろんその愛も永続しない。それは「自己の不安定性を顕示し」、「ふたたび逆の行為」へ、つまり性的欲望へ舞い戻っていく。愛と性的欲望は、そのように円環する関係性を形成しているのだ。サルトルによれば、「私」と他者の根源的な関係とは、このように愛と性的欲望の間を絶え間なく行き来する、「突然の方向転換を伴う」、不安定な「運行」に他ならないのだ。

しかし見方を変えれば、ここには愛が挫折した後で、再び愛が始まる可能性が論じられている、と考えることもできるだろう。愛は必然的に挫折する。しかしそれは、一度挫折した愛が、二度と再開しなくなる、ということを意味するわけではない。むしろ逆である。挫折した愛は必然的に再開するのだ。もちろん、再開された愛もいつか挫折するだろう。そうであっても愛が永遠に死に絶える瞬間が来るとは限らないのだ。

ここには、素朴な愛の永続とは異なる意味での、愛の持続可能性が示唆されている、と考えられる。それは、愛の再開可能性である。スティーブンスによって示された、「小さな愛」の持続可能性とは、愛を再びやり直すことができる、という意味で理解することで、愛の自壊性と整合的な解釈が可能になるのである。

7.　おわりに

以上において、本稿では、サルトルの『存在と無』における愛の概念を検討してきた。最後に、その思想は恋愛をめぐる今日の言説の状況において、どのような意義を持つのかを考察してみたい。

前述の通り、現代の日本社会において、依然としてロマンティック・ラブ・イデオロギーが支配的な影響力を持っている。そこでは、愛と性と生殖が結婚を媒介して一体のものとして捉えられている。このような言説のもとで、恋愛とはあくまでも制度的な契約のもとで完成されるものとして理解され、その持続はあくまでも戸籍の維持と同一視される。このような言説において理想化されているのは、一度誰かを愛し、その相手と結婚したのなら、死ぬまでその愛が絶えることなく、生涯をともにするような関係だろう。そのような関係だけが本来の愛として認められる。それに対して、途中で挫折した愛は、最初から本当に愛していたわけではなかった、と蔑視される。言い換えるなら、挫折に至った愛は非本来的な愛として性格づけられる。

しかし、サルトルの発想では、このような考え方は愛を誤った仕方で捉えていることになる。なぜなら愛とは必然的に挫折するからだ。彼の発想に従うなら、生涯にわたって変わることなく相手を愛し続ける状態の方こそが、愛にとって不自然である。そうした愛は、何かしらの仕方で相手を自分との関係性に縛りつけ、その自由を奪っているのかも知れない。それに対してサルトルは、相手の自由を「私」からは犯しえないものとして、「私」にはどうすることもできないものとして認めることを、愛の条件に据える。この意味において、サルトルの恋愛論は傲慢や暴力を戒めるものであり、「小さな愛」として性格づけられる。

しかし、必然的に挫折へ至らざるをえないのだとしても、愛の持続可能性そのものが棄損されるわけではない。なぜなら、愛はまた再び開始されるからである。私たちは、たとえ誰かを心から愛し、そしてその愛が破滅に終わったとしても、また新たに誰かを愛することができる。何度、挫折に至り、新たにやり直すのだとしても、それは愛が劣化していくことを意味しない。そのように何度でも再開されていくという点にこそ、愛の持続可能性を見出す

ことができる。

翻って、ロマンティック・ラブ・イデオロギーに支配された愛は、こうした再開可能性を著しく制約することになるだろう。人間が生涯のうちに結婚できる回数、あるいは生殖ができる回数は、現実的に考えるならおそらく有限だからである。そうであるとしたら、この言説は、実際にはすでに愛が挫折に至っているにもかかわらず、その再開を妨げ、人間を抑圧するように機能するかも知れない。これに対してサルトルの思想は、こうした抑圧を打破する、別の見方を提供してくれる。そこに彼の恋愛論の今日的な意義があるに違いない。

注

1. サルトルの恋愛論の大きな特徴は、「私」が能動的に相手を愛することではなく、他者から愛されるという出来事として愛を論じる点にあるが、それは彼にとって恋愛論が、あくまでも他者のまなざしに対する「私」の原初的な態度の一つとして分析されているからである。

2. サルトルは、本論で説明した二つの挫折の契機に加えて、第三者からの「まなざし」によって愛が挫折する可能性も指摘している。本論で述べている通り、愛の条件は、相手が自由であることである。しかし、「私」と相手の二人が、その外側から第三者によって「まなざし」を向けられると、「私」だけではなく、「私」を愛していた相手もまたその第三者に疎外され、即自存在へと対象化される。即自存在と化した相手は、もはや自由を失っているのであり、「私」はその相手から愛されたいとは思えない。サルトルによれば、だからこそ、「愛が絶対的な帰趨軸というその性格を保つことができるためには、相手とただ二人きりで世界に存在しなければならないであろう」(ibid., 417)。しかしそれは現実には不可能なのであるから、愛は第三者による脅威に常にさらされ続けているのである。サルトルは、本論で指摘した二つの挫折の脅威に加え、この第三者の「まなざし」による愛の挫折の可能性を、愛の「三重の自壊性」(ibid., 417) と呼ぶ。そして、これらの諸契機によって破綻した恋愛は、マゾヒズム・サディズム・憎しみといった別の形態の関係へと移行するよう促される。ただし、これらの新たな関係性の形態については、それ自体はもはや恋愛の関係ではないため、紙幅の制約から、本論では本格的に論じることができない。

参照文献

熊野純彦
2022 『サルトル：全世界を獲得するために』講談社。

リラール，シュザンヌ
1972 『サルトルと愛――その哲学・文学における情念論の考察』榊原晃三訳、サイマル出版。

千田有紀
2011 『日本型近代家族――どこから来てどこへ行くのか』勁草書房。

戸谷洋志
2024 『恋愛の哲学』晶文社。

吉澤夏子
2014 「現代の愛のかたち――ロマンティック・ラヴ・イデオロギーはどこへ行ったか――」『応用社会学研究』No.56:109-121。

吉永和加
2004 「隔絶した自己と他者とを繋ぐもの：サルトルにおける責任について」『メタフュシカ』第35巻:13-26。

Rae, Gavin
2012 Sartre on Authentic and Inauthentic Love. *Existential Analysis: Journal of the Society for Existential Analysis* 23, n. 1:75–88.

Sartre, Jean-Paul
1943 *L'être et le néant: Essai d'ontologie phénoménologique*, Éditions Gallimard（=松波信三郎訳、『存在と無：現象学的存在論の試み』、Ⅰ-Ⅲ、2007年、筑摩書房）.

Stevens, Chris
2008 A Critical Discussion of Sartre on Love. *Stance* l:2-7.

Wyatt, Jean
2006 The Impossible Project of Love in Sartre's "Being and Nothingness, Dirty Hands" and "The Room". *Sartre Studies International* 12, n. 2:1-16.

On Sartre's concept of love : Focusing on his phenomenological theory of the other in *Being and Nothingness*

Yuki AKAGI

Abstract

The main theme of this paper is to examine how it is possible to live together with others in romantic relationships, based on the ideas of the French philosopher Jean-Paul Sartre. In modern society, romantic love ideology, which sees love, sex and reproduction as one and the same through the medium of marriage, has become the dominant discourse surrounding romantic relationships. In *Being and Nothingness*, Sartre analyzes the way in which romantic love inevitably leads to frustration as part of his phenomenological theory of the other. While his theory of love has been criticized in previous studies as overly negative, his analysis, which respects the freedom of the other, is also being reevaluated as a view of love that relativizes romantic love ideology. However, it is not clear how such a love that leads to frustration can be reconciled with the sustainability of romantic love. From this perspective, this paper re-examines the phenomenological theory of the other in *Being and Nothingness*, and considers how the sustainability of love can be understood in this context. The aim of this paper is to clarify the contemporary significance of Sartre's theory of love.

Keywords : Sartre, love, gaze, other, phenomenology